

愛知大学人文社会学研究所 2018 年度活動報告

愛知大学人文社会学研究所は、2018 年度の活動として以下を実施した。(1) 愛知大学人文社会学研究所機関誌『文學論叢』の発行、(2) プロジェクト・研究会の実施と研究活動費の助成、(3) 公開講座およびシンポジウム・ワークショップの主催。各活動の概要は次のとおりである。

(1) 愛知大学人文社会学研究所機関誌『文學論叢』の発行

『文學論叢』第 156 輯（全 120 頁、論説 4 編、研究ノート 1 編を所収）を 2019 年 2 月 20 日に発行し、国内 360 ケ所、海外 20 ケ所の各大学、研究機関および図書館に寄贈のうえ、愛知大学の学生にも広く配布した。また 2019 年 9 月より、愛知大学リポジトリにて公開した。

なお、第 153 輯以降の『文學論叢』には、論文の質の保証と向上を目指して設けた投稿要領・査読規程が適用されている。

(2) プロジェクト・研究会の実施と研究活動費の助成

所員を中心に組織されるプロジェクト・研究会（「国際英語」教育研究会）において、その研究プロジェクトを遂行するとともに、これにかかる研究活動費を助成要領に基づいて助成した。

「国際英語」教育研究会は、2017 年度～2018 年度の 2 年間で研究活動期間としており、最終年度にあたる 2018 年度は、国際学会への参加とフォーラムの開催が主な活動となった。当該プロジェクト・研究会の概要と 2018 年度の活動は、以下のとおりである。

・「国際英語」教育研究会

- 1) 概要：現代国際英語専攻の学生の学ぶ意欲や意識の変化について調査を行い、国内で「国際英語」に取り組む研究者と交流を図り、調査結果を国際学会 ELF (English as a Lingua Franca) にて発表する。
- 2) 代表研究者：ローラ・リー・クサカ（短期大学部）
- 3) 共同研究者：ピーター・ライオンズ（文学部）
 ダニエル・デヴォリン（文学部）
- 4) 2018 年度の活動：
 - ・国際学会 ELF11 (11th International Conference of English as a Lingua Franca) における研究発表

- 発表タイトル：Through an ELF-filtered Lens: Evolving Perceptions of Teaching and Learning English
- 開催日：2018年7月4日
- 開催地：ロンドン
- ・国内で「国際英語」に取り組む研究者を招聘してのフォーラム開催
 - テーマ：ELFing Up the Classroom: Pedagogy and Materials —共通語としての英語、English as a Lingua Franca (ELF) の研究に基づいて、英語教育の教授法や教材を再確認する—
 - 開催日：2018年10月27日
 - 会場：豊橋校舎 研究館1階 第1-2会議室
- ・アンケート等の聞き取り調査の実施

なお、当該プロジェクト・研究会による研究活動の成果報告書として以下を発行し、愛知大学リポジトリにて公開している。

- ・ April Eve Day, Daniel Devolin, Laura Kusaka, Peter Lyons, Simon Sanada, and Anthony Young, *Report for “International English” Education Research Group, The Institute for Research in Humanities and Social Sciences, Aichi University, Academic Years 2017-2018* (2019年3月20日, 全7頁)

(3) 公開講座およびシンポジウム・ワークショップの主催

人文社会学の基礎研究を推進するため、内外から講師を招聘し、全3回にわたる公開講座1件、および、3件のシンポジウム・ワークショップを主催した。これらの実施にあたっては、新聞社・市民館・高校・大学などにフライヤーを配布するなど事前広報を行い、一般公開した。いずれの企画も、本研究所の設立趣旨に基づき、なおかつアクチュアルなテーマをとりあげたものであり、招聘した外部研究者や参加者を交えて活発な議論が交わされた。2018年度に主催した公開講座およびシンポジウム・ワークショップのテーマは、以下のとおりである。

- ・ 公開講座のテーマ（開催時期、会場、企画者）：
 - 「あなた」と「わたし」（2018年6月16日～10月6日、豊橋校舎 研究館1階 第1-2会議室／3号館 320教室、伊東利勝）

・各回のテーマ（開催日、講師）

第1回：民族の名前—その呪力について考える—（2018年6月16日、大澤真幸）

第2回：ジェンダーはいかに再生されるか？（2018年6月30日、上野千鶴子）

第3回：近代日本のダークサイドから考える「共に生きる」ことの意味—「隣人」とは？—（2018年10月6日、姜尚中）

・シンポジウム・ワークショップのテーマ（開催日、会場、企画者）：

- ヨーロッパ前近代の複合国家（2018年10月13日、豊橋校舎 研究館1階 第1-2会議室、小野賢一）※2018年7月28日開催予定であったが悪天候のため日程を変更して開催

- ネオリベラリズムを再審する—都市・空間・統治—（2018年12月9日、車道校舎 本館13階 第3会議室、植田剛史）

- 聖職者と女性の歴史学（2019年2月23日、豊橋校舎 研究館1階 第1-2会議室、小野賢一）

上記の公開講座の報告書として、伊東利勝編『「あなた」と「わたし」—内と外をへだてる知—』（2019年3月20日、全218頁、各報告に基づく論考5編を所収）を印刷・発行した（2020年3月より愛知大学リポジトリにて公開予定）。

また2017年度に開催されたシンポジウム・ワークショップの報告書として、以下を印刷・発行した。

・近藤暁夫編『夢の種を蒔く、地域再生の哲学—人を突き動かすのは何か—』（2019年3月20日、全127頁、各報告および総合討論の記録を所収）※2019年4月より愛知大学リポジトリにて公開

・小野賢一編『帝国と魔女で読み解くヨーロッパ』（2019年3月20日、全66頁、各報告に基づく論考3編を所収）※2020年3月より愛知大学リポジトリにて公開予定

・片岡邦好編『みんなの知らない方言の世界』（2019年3月20日、全113頁、各報告に基づく論考5編を所収）※2019年3月より愛知大学リポジトリにて公開

以上に加えて、2017年度に開催されたシンポジウム・ワークショップの報告書として、安達理恵編『他教科連携の外国語教育とCLILの可能性』（2018年9月20日、全48頁）を発行し、愛知大学リポジトリにて公開したほか、愛知大学リポジトリにて既に公開されているワークショップ報告書：植田剛史編『社会調査の成果を社会に還元するために—調査実践

をとりまく磁場と調査者の役割を再考する―』(2018年3月31日発行)を印刷した。